

天声人語

友人からは「いい年をして今更、なぜ社交ダンスなど習うんだね」とあざけられる。妻からは「年よりの冷や水」と言われる。50歳すぎでダンスの教習会に通う主人公は、老い始めた自分の肉体と向き合う。遠藤周作の1970年代の短編「五十歳の男」である▼若い人たちと一緒にステップを踏むことに疲労を感じ、あえぎながら坂をのぼる古い自家用車に自分を重ね合わせる。いま読むと老いるのがやや早いかとは思うものの、人生の峠を過ぎた悲哀が伝わってくる▼そんなたそがれとは無縁の人なんか。肉体も情熱も衰えを知らないかのような動きに驚く。サッカーの三浦知良さんがJリーグ史上初めて50歳でゴールを決めた。頭に白いものが交じりながら疾走である。得点の後、独特的のステップを踏む力ズダンスも健在だった▼三浦さんは最近、雑誌「Number」でこう語っている。「身体の衰えはあるにしても、思つてのこと、やりたいことは若い頃から何も変わつていなんです」。試合に出られない悔しさは3年前と変わらないとの言葉もあつた▼何歳になつても現役のままでポールを追いかける。長く生き、長く活躍が求められる現代での一つの生き方なのだろう。同世代としてまぶしく感じるのは、少し運動すると悲鳴を上げるようになつた自分の体の変化ゆえか▼誰もが力ズのように走り続けられるわけではない。それでも、彼の姿を見ていると、「落ち着くのはまだ早い」と背中を押される気がしてくる。

2017・3・14